上越教育大学研究紀要　第24巻　第2号　平成17年３月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 24, No. 2, Mar. 2005

小学校音楽授業における「チンドン」を題材とした日本音楽の学習

茂手木　潔　子*・秦　野　育　子**

（平成16年10月29日受付；平成16年12月８日受理）

要　　旨

本研究は，「チンドン」の音楽を題材として，小学校高学年における日本音楽への導入を試みた研究である。過去には「チンドン屋」と呼ばれてきたこの演奏活動は，19世紀半ばに起源をもち昭和30年代に最も盛んに行われた。しかし，この演奏活動が，これまで音楽教育で応用されることはなかった。その理由は，学校の音楽教育が志向する「音楽」の価値観と，巷で行われた路上音楽との価値観とが大きく異なっていたためである。

しかし，近年の多様な音楽文化の時代に，あらためて「チンドン」の音楽的特質に注目すると，そこには，歌舞伎や民俗芸能の音楽の特徴との共通点が多いことがわかる。共通の特徴とは，臨機応変な音楽作りや，様々な発音具を楽器として取り入れて音色に活かす点である。また，身体的運動を伴って演奏されることも，新内節の門付けや，仏教の行道の音楽と共通する。今回，実践研究において，「チンドン」を題材としたことが，児童の音楽活動への意欲を高め，豊かな表現力の育成に有効であるとともに，日本音楽への導入教材としても有用であることが分かった。

KEY WORDS

チンドン	Chindon; Japanese advertisement music
音具	sound sources
日本音楽の学習	study of Japanese traditional music
音楽における多様性	diversity in music
プロセス重視	emphasis on process

１．本研究の意図

平成14年４月６日（日曜日），私たちは富山市の城址公園で毎年開かれる春の風物詩「全日本チンドンコンクール」第48回大会の会場にいた。全国各地から集合する，プロ，アマチュアのチンドングループが，年１度，ここ富山に集合してチンドンの音楽の技と趣向を競い合う場である。

富山市観光振興課の資料によれば，富山でチンドンコンクールが始まった理由は，昭和20年８月２日，大空襲により壊滅的な被害を受けた富山市街地の復興のため，「桜まつり」の目玉として「全国チンドンコンクール」という観光行事を立ち上げたことに始まるという。参加団体

*　上越教育大学芸術系講座（音楽）
**　上越教育大学大学院修了，新潟県上越市立直江津小学校教諭

は全国各地から集合している。平成14年の場合は，東京，大阪，福岡，長崎，富山，兵庫，神奈川，長野，静岡，広島，新潟，埼玉，茨城，三重の各地からプロの団体や素人のチンドン研究会など様々なグループが集まった。筆者は，このチンドンの囃子の構成や演奏法の中にある，自由で豊かな音楽表現の発想に前々から注目していた。今回，小学校高学年における日本音楽の教材開発の一環として「チンドン」を取り上げ，その有効性を検証した。

1.1　チンドンを音楽教育で扱う目的

筆者は1990年代以降の研究活動の中で，歌舞伎の下座音楽や，民俗芸能の音楽，そしてチンドンの音楽など，日常性の中から発想されてきた音楽活動の持つ自由自在な発想（楽器編成，楽曲の引用状況，雑音の意図的な取り込み方，楽器の範囲の拡大など）こそ，日本音楽の表現の原点に位置づく可能性があると考えるようになった。そして，この日常性の中で表現される音楽活動に注目することによって，身近なところからの表現の可能性が出てくるとも考えた。また，「練り歩く」方法は，伝統音楽の演奏様式においても良く行われることであり，例として，「神輿の巡行」「新内流しなどの演奏法」民俗芸能における山車の「練り行列」がある。これらの「練り歩く」芸能の最小規模として，「チンドン」の歩行を考えることができる。

このような特徴から，学校教育における日本音楽の導入には，複雑で高度な構成の歌舞伎や雅楽を取り入れる前に，身近な生活の中の音楽を用いることが有効ではないかと考えるようになったわけである。

今回，チンドンを音楽教育に取り入れる具体的な理由を次に挙げよう。まず，次の２点がある。

(1)　日本の音楽への導入として効果があるのではないかと考えるため。

(2)　日本音楽というジャンルにこだわらず，チンドンのアンサンブル方法が，多様な音楽教育にとって格好の材料となるのではないか。

以上の２つの観点で考えられる事柄は，以下の通りである。

まず，日本音楽の特徴を備えているという理由について。

- 歌舞伎の下座音楽の一部に見られる日本音楽のアンサンブル法と共通の特徴を持っていると考えられる。それは，生活の中から発音可能な道具を楽器として選んでいること，また，身近にある国内国外の楽器を自由に取り入れていること，そして，演奏スタイルにも，歌舞伎の演劇的な要素が取り入れられている点。
- チンドンの楽器の音色には，日本の三味線や尺八などの音色と共通の「非調和成分音」が多く含まれている。また，意図的に，雑音性の高い音色をアンサンブルの中に取り込む工夫もされている。
- 音楽教育における，身体的動作を伴った音楽の事例として，歩く動作とともに演奏されるチンドンは好例となるのではないか。
- チンドンの口上では，歌舞伎の台詞回しなど伝統音楽の声の出し方や抑揚を体験することができる。

また，教育的な効果としては，次の点が考えられた。

- 総合的な学習の時間に適する教材となりうる。この場合の総合とは，次の要素の総合である。

　① 音楽，演技，口上などによって多面的に構成されている点。

② 様々な扮装をするための工夫によって，衣への関心を育てることができる。(これは，美術や家庭科の学習とも関連する)

③ 数人一組で行動することにより，共同作業による「ものづくり」を体験できる。

④ 宣伝のためのキャッチコピーを作ることで，広告，広報などについての関心を育てることができる。〔これは，社会の学習とも通ずる〕

● チンドンの即興性，楽器編成の工夫など，「作って表現する」音楽の教材として有用だと考えられる。

① 動きを伴った音楽の教材として，新たな教材開発ができる。

上記のように，この教材は，音楽授業の範囲を超えて，様々な活用ができる教材となる可能性があった。

1.2 用語の定義

1.2.1 チンドン

「チンドン」は，昭和30年代には「チンドン屋」と呼ばれていた。小学館『日本国語大辞典』(第2版)には，その特徴が次のように記されている。

「人目につく姿で，鉦・太鼓・三味線，またトランペットやクラリネットなどの楽器を鳴らしながらにぎやかに町を練り歩き，商店や劇場などの広告宣伝を行う職業。また，その人」。

また，用語の初出としては，1930年の細田民樹による『真理の春』が挙げられている。近年は，「屋」を取って「チンドン」として音楽面に焦点を当てて呼ばれるようになっていることから，本論文でも「チンドン」の呼称を用いることとした。なお，「チンドン」は，演奏に使う，鉦と太鼓をセットにした「チンドン太鼓」からの名称でもある。(写真1　チンドン太鼓とチンドンの演奏)

写真1

1.2.2 音具

音具の用語については，平成16年9月刊の茂手木潔子・江谷和樹著「日本の音具を題材とした日本音楽の学習―小学校低学年を対象として―」『上越教育大学研究紀要　第24巻　第1号』p.201でも定義したので，ここでは簡単に述べておく。音具とは，1976年1月19日，東京都の南画廊で行われた「音のオブジェと音具展・鈴木昭男の世界」で一般に知られた用語であるが，それ以前に，鈴木と交流のあった藤原和通が，コンクリートと材木を組み合わせて大きな音を立てる音のオブジェに対して使い始めた用語である。その後，J. Cageに影響を受けた作曲家の一柳慧が，Sound Instrumentsの日本語訳として藤原の用語を使い始めたことをきっかけに用語が一般化した。一柳の場合は，いわゆる西洋音楽の楽器以外の世界の様々な発音具に対して用いている。藤原の使い始めた「音具」の意味と一柳の「音具」の意味とは明らかに異なっている。今回の研究では，一柳の用語法を用い，歌舞伎の鳴り物や玩具など，一般的な12平均律の音律によらない，言い換えれば，ドレミの音階を出さない楽器や発音玩具，ハーモニーを作ることの出来ない打楽器類などを総称する用語として用いる。

1.2.3 非調和成分音

この用語についての定義も，前掲論文 p.202ですでに定義済みであるが，特定できる音高を持ちにくく，高周波数成分を多く含む音色を意味している。

1.2.4 口上

歌舞伎舞台の襲名披露公演などで行なわれる自己紹介の様式的な陳述方法にのっとって，チンドンで観客に向かって述べられる，日本語の抑揚を活かした語り口をさす。平凡社『歌舞伎辞典』（昭和58初版）によれば，「歌舞伎などの芸能で，舞台上から役者・頭取が観客に挨拶を述べること」とされている。

1.3 チンドンの概略

堀江誠二によれば，チンドン屋の元祖は，1845年に大阪の千日前あたりで「竹で作ったガラガラ」を鳴らして飴を売り歩いた「飴勝」だとされている。江戸時代に登場する飴売りには，チャルメラ（別名「唐人笛」とも言う）を吹いて売り歩くものがいたが，「飴勝は，人々の注意を引き寄せるため，拍子木と腰にぶら下げた鈴の音を賑やかに鳴りひびかせた」[1]という。

明治時代，東京では宣伝を広め歩く「広目屋」が登場する。その様子は，明治24年〔1891〕の都鄙新聞に「数十名の人夫異様の扮装をなし数組に分かれて歌ひつ舞ひつ漫歩せしが」と描写されているという。ものを売り歩くのではなく，宣伝業として独立したので，「広目屋」もまたチンドン屋の元祖と言えよう。初期の広目屋は，明治期に各所で組織された「軍楽隊」の楽器を用いていたというが，異様な風体をすることは，17世紀初頭に出雲の阿国が京の四条河原で歌舞伎踊りを始めた様子を思い出させる。

「チンドン屋」は，戦後の昭和30年代に日本の各地で盛んに見られたが，TV などの宣伝媒体の発達によって，近年はほとんど見ることがなくなった。しかし，NHKTV のドラマでチンドン屋を目指す若者たちの物語が取り上げられたことをきっかけに，再び，その活動が現代的な視点から注目されるようになっている。現代的視点とは，大道芸や門付けに対する，パフォーマンスとしての関心が国際的に強まり，チンドンのグループによっては，世界に演奏の場を広げている若者たちもいるほどだ。

ところで，「チンドン」の呼称は，このような宣伝活動を担ってきた「チンドン屋」の名称から起こっているが，現在「屋」をつけた名称を使うことは少なくなっている。「屋」というのは，「八百屋」「魚屋」など，「屋号」であり，一般的に専門の職業を表す名称であるが，「チンドン屋」の場合は「チンドン」が，楽器の音を聞きなした名前である点，他の屋号とは意味が異なる。「チン」とは，フライパン方の鉦（かね）で，祭囃子で使われる「当り鉦」の音から来た名称である。また，「ドン」は「太鼓」を打つ音から来た名称で，「チンドン」の囃子には，この，「鉦」と「太鼓」を組み合わせた「チンドン太鼓」が必ず必要である。

1.4 チンドンに登場する多様な楽器

チンドンの音楽は，基本的にチンドン太鼓と管楽器，弦楽器で構成されるが，他にも様々な楽器や音響機器が登場する。平成14年の大会では，次の楽器類が登場した。

打楽器類：チンドン太鼓，桶胴（写真２），小太鼓（写真３），しゃもじ，拍子木，杖鼓（写真４）タンバリン，シンバル

写真2

写真3

写真4

写真5

写真6

写真7

写真8

管 楽 器：クラリネット，サックス，フルート，トランペット（写真5），篠笛
弦 楽 器：バンジョー（写真6），ヴァイオリン，ウクレレ，ギター，三味線
鍵盤楽器：アコーディオン（写真7）
音響機器：歌の拡声のために意図的に旧式に作られた小型スピーカー（写真8）

2．先行研究

現時点での調査範囲では，チンドンを用いて，日本音楽への導入を図る実践研究はまだ見つかっていない。

その理由は，「チンドン」の音楽が置かれてきた状況にある。すなわち，音楽教育の歴史の中では，「チンドン屋」の音楽を，音楽教育との関係で取り上げようと考えることは想像だにしていなかったであろうから。チンドンの音楽を「日本音楽史」の中に位置づけた特異な例として，William P. Malm *JAPANESE MUSIC AND MUSICAL INSTRUMENTS* (Charles Tuttle Company 1959) p.62があり，ここには，チンドンがストリートミュージックの例として写真で取り上げられている。

3．実践研究の概要と意図

今回の研究の前段階として，茂手木は多様性とプロセス重視の2つのキーワードを日本音楽の主要な特徴として挙げてきた[2]。多様性とは，楽器の素材に多くの材料を用いること，様々な

演奏の方法を駆使して多様な音色・声質を作り出すこと，そして多くの曲種を同時に組み合わせて総合的な表現をすることなどを意味し，またプロセス重視とは，楽器の発音法，旋律法におけるユリ，スリなどに聞かれる演奏法や，演奏法習得の過程で見られる特徴についての表現方法をさしている。実践について考えたとき，秦野は，この考え方をもとに授業を構築する方法はないかと考え，初期の段階では音を出す日本のおもちゃを題材として実践を試みてきた[3]。この実践を通して，発音玩具から日本音楽の多様性とプロセス重視の特徴を学ぶことが十分可能であることが明らかになった。そこで次の段階としておもちゃ以外で日本音楽の特徴を学ぶよい題材はないかと考えた。

鉦と太鼓を組み合わせた「チンドン太鼓」に様々な管楽器，弦楽器，打楽器，口上を加えた表現法は独特である。「チンドン」の音楽表現で継承されてきた日本の楽器と様々な国の楽器の組み合わせは，さながら現代音楽の実験的なシーンに多く見られる伝統とコンテンポラリーミュージックとのコラボレーションのようだとも感じた。

『小学校学習指導要領』「A 表現(4)のイ」に，「自由な発想を生かして表現し，いろいろな音楽表現を楽しむこと。」とある。さらに，この項目は次のように解説されている。「身の回りのいろいろな音の響きに気付き，児童一人一人のイメージに基づいて，自由な発想の下に表現活動をする能力について示したものである。高学年では，中学年における即興的に音を選んで，情景や気持ちを表現するなどの活動をより発展させ，児童が自由な発想で，今まで経験してきたいろいろな音の響きや，その組み合わせを生かして，音楽表現の可能性を探り，それらの多様な表現を自ら楽しむようにすることが指導のねらいとなる。」[4]

小学校高学年の児童が，これまでの音楽経験を生かして，自由な発想で音楽作りを楽しむことを目的としたならば，1.1ですでに述べたように，まさにチンドンは格好の題材である。ここではチンドンの音楽的特性を生かした学習課程を組むことにより，いかに日本音楽の特徴を学ぶことができるかを本実践で明らかにしたいと考えた。

3.1　実践の内容

期間：2002年11月

対象：新潟県上越市立春日小学校５年生（33名）

実践は，題材名を「チンドン～音色の移り変わりで楽しむ日本の音楽の指導法」とし，ねらいは以下の２点であった。

(1)　いろいろな音の響きや音色の組み合わせを生かした多様な表現を楽しむことができる。

(2)　鉦や太鼓を中心としたチンドン作りを通して，日本の音楽の特徴を学ぶことができる。

3.1.1　実践に至るまでの経過

児童は，2000年９月～2001年７月にかけて，身の周りの音を集めたり，自然の音に耳を澄ましてまねたり，身体表現をしたりしながら音遊びを楽しんできた。家にしまわれたままになっていたおもちゃや，土産物屋で買い求めた小さな日本のおもちゃを集め，それぞれを組み合わせたり重ねたりするうちにきれいな音の響きに気が付いていった。でんでん太鼓や各種の鳥笛から生まれた音色は，どれも小さくて素朴な音ばかりだった。そのような音色の数々を集め，そこに祭囃子の唱歌，宮太鼓，締太鼓，小鼓，篠笛，擬音笛を加え音風景を描き出す試みに筆者は挑戦してきた[1]。この実践において，児童はおもちゃの音に耳を澄ませ，生き生きと音

楽作りに取り組んだ。この姿から，おもちゃが奏でる音の世界には，通常，楽譜を読んだり，リコーダーや鍵盤ハーモニカを演奏したりすることに，抵抗感・苦手意識の強い児童が主役となって活躍する可能性があることが確認できた。

2002年９月から10月，総合的な学習で取り組んできた学校田での収穫祝いでは民謡を中心に番組構成し音楽作りを楽しんだ[2]。日本各地の特徴ある民謡の数々は，中学年の頃より折りに触れては繰り返し視聴させてきたが，視聴後の児童の感想は以下の通りであった。《八木節》《こきりこ節》《大漁唄い込み》についてここで取り上げておく。（写真９-10）

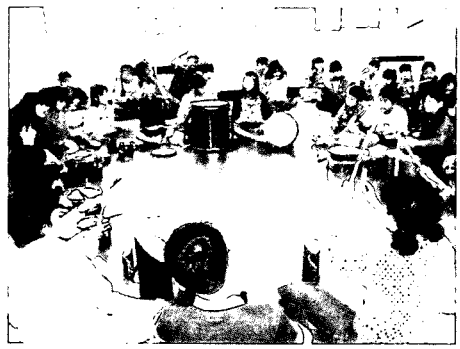

写真９

写真10

(1) 《八木節》[3]

・しわがれた声が，太鼓や笛などの楽器と相性がとってもいい。樽太鼓の音とドーンとした声がとってもいいバランス。間奏の笛（ピーヒャラ）という音といろいろな太鼓，鉦の音がかっこいい。
・自分の声でしっかりと歌っている。声がつながっている。
・「ぱん」と勢いのある声。気持ちよさそう。
・声がとぎれることがない。
・祭りのようににぎやか。
・１フレーズをのばして続けて歌っている。

(2) 《こきりこ節》[3]

・声を大きく思い切り出している。
・ゆれるよう。力強くってわけではなく，自然にすごい声が…。ささらの音がよくわかる。
・はげしく歌っている。
・囃子のところは大勢。
・声をのばしている。続けて言葉を言っている。１番２番とテンポを変えている。最後はゆっくりになって終わっている。
・いろいろな人の声を合わせている。
・声がふるえている。
・地声で歌っている。

(3) 《大漁唄い込み》[3]

・とても力強い声。楽器がないのに全然物足りなくない。ポーンと張り上げた声，強弱がすごい。漁の場面を自然に想像させてくれる。
・とても気合いの入っている声や歌い方だった。声に張りがあって，言葉がはっきりとは分かりにくい。

・腹からおもいっきり。へろへろ
・地声，大声で歌っている。
・声が小さくなったり大きくなったりしている。
・叫ぶところもあるし，普通に歌うところもある。

実際には，《こきりこ節》《てぃんさぐの花》《八木節》を題材に，太鼓や鉦，篠笛などを加え，歌ったり踊ったりしながら音の響きの移り変わりを表現していったが，歌を得意とする児童は歌を，楽器を得意とする児童は楽器を，踊りをやりたい児童は踊りを選択させた結果，思い切り自己表現を楽しむ姿が見られた。

3.1.2　題材の価値

茂手木は，音楽学的観点からチンドンの音楽的特性を以下のように分析している[5]。

(1)　鉦と太鼓の基本編成に，打楽器中心の日本音楽の特徴が良く表現されている。
(2)　「チンドン」という呼称は，日本の「聞きなし」文化を象徴している。
(3)　チンドンは，身の回りにある楽器を何でも取り込んで，アンサンブルを作ることができる。これは，歌舞伎の下座音楽の楽器構成や音楽作りの発想と同じである。
(4)　同時代性がいのち。言い換えれば，その時代の音楽や楽器を反映することが大事である。これは歌舞伎の音楽作りにも共通の考え方である。
(5)　旋律の反復により音楽を構成し，反復する旋律やリズムを徐々に変化させることでクライマックスを作る方法は，伝統音楽の音楽構成方法と共通している。

これらの特徴を今回の児童によるチンドン作りに当てはめ，題材の有効性を以下のように考察した。

①　鉦と太鼓など打楽器は，児童には大変人気がある。また，「叩いて鳴らす」という行為は音楽表現の基盤を成す仕組みであるが，児童の関心・意欲を高めることにつながる。さらに，鉦と太鼓の組み合わせは，祭囃子などの基本的な楽器編成につながる。
②　児童は，おもちゃを使った音楽作りで，祭囃子の唱歌や声明を模したオノマトペを駆使しながら混沌とした響きのおもしろさを作ることや，楽器の音色を唱歌で覚える体験をしてきている。今回の〈自分たちのチンドン作り〉でも，その経験を活かしながら，日本音楽への導入をはかることが出来ると考えた。
③　鉦と太鼓の基本編成に，身の回りの好きな（得意な）楽器を何でも加えてアンサンブルを作るチンドンの自由さには，楽器の得て不得手に関係なく，児童が音楽作りに自由に参加できる利点がある。
④　口上を重視するチンドンは，《八木節》で学習した「口説（くどき）」[4]や，過去のできごとを叙事的に述べる「語り」にも通じ，児童の今の主張や願いを台詞として，自由に音楽に取り込むという手法を学ぶことができる。また，自己表現，自己コマーシャルを楽しむこともできる。
⑤　簡単で短い旋律を「型」として繰り返すことによりそれぞれのチンドンに統一感を出させ，なおかつ，その中での変化を際だたせるという奏法を体験することができる。

以上の考察から，児童によるチンドン作りは，様々な楽器や音具を取り込むという発想，音色の選び方や音楽構成のコンセプトが伝統音楽と共通している点で，日本の音楽の特徴を学ぶための有用な題材になりうるのではないかと考えられた。

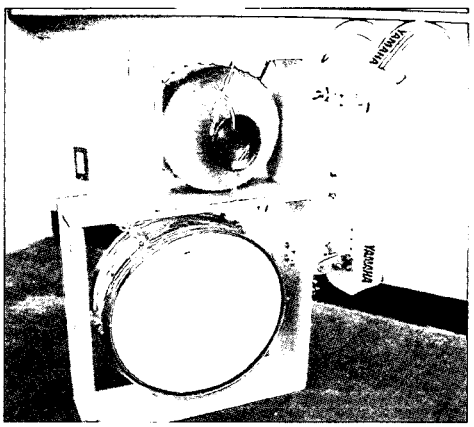

写真11

写真12

3.1.3　ねらい達成のための支援

まず，チンドンの特徴を視覚，聴覚から捉えるために，実際のチンドンをVTRで視聴した[5]。視聴後，自由にチンドンの特徴を挙げさせ，それらを整理しながら学習のめあてを一人一人明確に摑ませた。そして本物のチンドン太鼓を見せ，その上で「みんなで自分たちのチンドンを作ってみよう。」と投げかけ，関心･意欲を高めることを考えた。本物のチンドン太鼓を用意することは困難であったが，手作り楽器を得意とする楽器店に，チンドン太鼓を作っていただくことができた。使用した楽器は，スネアドラムのスネアをはずしたもの，そしてベルをとったタンバリンを合わせて両面太鼓にし，木の枠に吊した(写真11)。当り鉦は，左手で打てるように組み合わせた。肩に掛けるために最初紐を考えたが，負担がないようにとスネアドラムのキャリングホルダーを取り付けた。そして総重量6.2kgの立派なチンドンが完成した（写真12)。

実際の音楽作りのプロセスでは，これまでの経験を想起させた上で慎重に楽器を選ばせ，それぞれのグループが考えた口上との組み合わせを工夫させていった。その際に一人一人に明確な役割を持たせ，さらに意欲を喚起することを意図した。同時に，日本の音楽の特徴である音色の移り変わりを重視させるように支援した。

まとめとして，チンドン大会を設定したが，チンドン及び日本音楽の特徴を取り入れた審査項目を，自分たちで考えさせ，相互評価させると共に相互認知し合う場ともした。富山のチンドン大会では，審査のポイントとして次の4点が設けられている[6]。

① 基本の技術(基本の伝統技術である鉦や太鼓等の完成度，左右の手の動きや叩きがしっかりしているか，チームワークがとれた息の合った演技をしているかなど)

② 口上（テーマをもとに工夫した分かりやすい表現であるか，勿論ユーモア，アイディアも大切)

③ 練り歩き（花道や舞台を歩くときも演技のうち)

④ 専門性（鉦や太鼓のリズム感，クラリネットやトランペット等の演奏力といった音楽性，衣装や扮装，小道具がセンスやアイディアに富んでいるかといった美術的観点からの評価，踊りや舞いの演技力，表情，面白さ，パフォーマンス系との区別といった舞踊性等)

以上の観点を参考に審査項目を作ることを試みたが，これは児童の表現意欲や関心の方向にも大いに関わることなので，できるだけ音楽作りの過程で児童自身の言葉から導き出すことにした。そして，指導計画と評価規準を表1のように作成した。

表1　指導計画と評価規準（全7時間）

次	学習活動	教師の支援	音楽への関心・意欲・態度	音楽的な感受や表現の工夫	表現の技術	鑑賞の能力
1次 1時間	**チンドンの特徴の理解** ① チンドンのVTR視聴	チンドンの演奏場面のVTRを視聴させ，チンドンの特徴を見付けさせる。		チンドンの基本編成と様々な楽器との組み合わせの効果，響き合いについて理解を深めることができる。	特徴的な基本編成を摑むことができる。	楽器の種類・基本編成・楽器の音色・声の出し方・練り歩くという日本の行列の特徴を挙げることができる。
	② チンドンの特徴を見付ける。	チンドンの文化的背景についても簡単に触れる。 見付けた特徴を分類・整理して示す。	チンドンの特徴を理解し，自分たちのチンドン作りに意欲と見通しを持つことができる。			
2次 6時間	**チンドン作り** ① グループ作りとチンドンの計画案作成	グループごとに，口上や楽器の組み合わせを考えさせる。 チンドンの基本奏法を確認する。	個性的な口上を考え，意欲的にチンドン作りに取り組むことができる。	これまでの日本の音楽の学習を想起しチンドンにふさわしい楽器を選ぶことができる。	自分たちのチンドンに合う楽器を選択することができる。	
	② チンドンの練習	練習場面をVTRに撮り，表現を客観的に見直させる。	楽器の組み合わせや重なりを工夫しようとすることができる。 友達と協力して音楽と身体表現を工夫することができる。	基本となるチンドンのリズムとメロディーの生かし方を工夫することができる。 アイディアを生かし口上や演奏法を工夫することができる。	チンドンの基本奏法を身に付けることができる。 練り歩きながら演奏することができる。	聴き合いながら楽器の効果的な組み合わせを考えることができる。
	③ チンドンの音色と響きの調整	音色の移り変わり，リズムと旋律の組み合わせ，テンポに意識を向けさせる。		音色の移り変わりや多様な表現を感じ取りながら演奏したり聴き合ったりすることができる。	響きや音色の調整をすることができる。	チンドンを作る過程で，響きや音色の移り変わりを聴き合うことができる。
	④ チンドンの発表	審査ポイントを確認させる。 相互評価させ，互いの良さや工夫を見付けさせる。	各グループのアイディア，個性，良さを認め合い，チンドンの多様な表現を楽しむことができる。		自分たちが考え作り上げてきたチンドンを生き生きと表現することができる	互いの工夫や良い点を見付け，自分の言葉でまとめることができる。

3.2　授業の実際

3.2.1　第1次の活動

(1)　チンドンのVTR視聴[5)]

「おもしろいVTRを見せるよ。」と投げかけ，このVTRを撮りに行ったときの様子にも触れ，児童の関心を引き寄せながら時間を充分にかけて視聴させた。児童は，今日はいったいどんなVTRが見られるのかと，いつものように興味・関心でいっぱいの様子だった。児童は，まずチンドンということばの響きに注目したようだ。チンとドンという言葉が面白いらしく，あちこちから「チンドン，チンドン」と口ずさむ声が聞こえた。途中チンドンの歴史や文化的背景，富山と薬売りについても簡単に触れ，「このチンドンっていったい何だろう。

特徴は何だろう。」と考えさせ，シートに書かせていった。各自つぶやきや思いついたことを箇条書きに挙げていった。その後，共通の項目で分類し整理した。

(2) チンドンの特徴の分類整理

① 楽器について，児童は以下のように述べていた。

必ず太鼓とかね（鉦）がある。太鼓は二組になっている。絶対にチンとドンという音がある。楽器が一つ一つでなく合体しているやつがある。かねと太鼓と一体化になっている。チンチンチンとたくさん鳴らしているところにドンとやっている。みんな楽器を持ちながらおどっている。いろいろな楽器が出てくる。太鼓とかね（鉦）以外の楽器は決まっていない。太鼓が多い。フルートやトランペットなどふくものを持っている。

② 練り歩きについて児童は，次のように述べていた。

歩き方が面白い。歩き方が普通でなく，曲に合わせてのっている。行進みたいなことをやっている。ふらふらしている。横に行ったり，一回転したりしながら歩いている。くねくね歩いている。体を回しながら入場している。歩き方がいろいろ。

③ 口上については，以下のような感想が児童から出された。

劇やトークが面白い。たまに自分の名前も言っている。全部のチームが宣伝をしていた。最後にアピールしていた。

④ 全体的には，以下のように児童は捉えていた。

芸と音楽を一緒にやっている。リズミカルな音楽ばかり。３人で１組だ。面白い格好で演奏したりおどったりしている。芸をしながら登場していた。いろいろな演技をしている。着物やいろいろな衣装を着ている。変装している。みんな好きなことをやっている。観客を笑わせていた。爆笑がある。パフォーマンスをしている。笑顔満点。ゆかいなものが多い。楽器を持っていない人は特によくおどっている。音色に合わせておどっている。化粧が白で，目元や口は赤，お客の居心地をよくするためにゆったりとおどっている。あいさつをするときに楽器をスーとやめている。

上記の記述から，児童がチンドンの特徴をよく捉えていることが分かる。そこで，「さあ，次の時間は」と言いかけたところすかさず「やってみるの？」と意欲的な声があがった。そこで「みんなでチンドンを作ってみよう。」と次時の予告をしてこの時間を締めくくった。チンドンのVTRを視聴した当日，グループ日記に男子児童Aは次のように書いた。

「今日１限に音楽をしました。チンドンというビデオを見ました。３人１組でたいこと，かねを必ずもっていて，その他に打楽器などであちこち歩き回りながら歩いていました。とっても楽しそうでおどりたくなってしまいました。」

Aがチンドンに好印象を持ったことが分かった。

3.2.2 第２次の活動

(1) グループ作りとチンドン作りの計画案作成（楽器選びと口上作り）

最初に「チンドングループをどのように作ろうか。」と投げかけたところ，考え込んでしまう様子が教室全体に見られた。多分生活班がいいのか，好きな者同士がいいのか決めかねているのだと思った。また，チンドンは基本的に３人一組だが，何人一組がやりやすいのかも

大事な問題だった。誰と組むかによって内容が大きく左右されることを児童はよく分かっている。そこでまず，どんなことを表現したいか，どんな方法でチンドンを作っていきたいか，表現内容から考えていくことにした。

これまで取り組んできた音楽学習の体験を想起しながら，チンドンでやってみたいことを挙げていった。児童はラップミュージック，ボディーパーカッション，ボイスパーカション，民謡チンドン，よさこいチンドン，一芸，漫才，ギャグ・チンドン，打楽器アンサンブルチンドンを挙げた。また，やってみたい楽器として，リコーダー，篠笛，トロンボーン，チャッパ（歌舞伎の小型シンバルの呼称）など様々であった。その後やってみたい表現グループごとに希望をとって分かれてみた。そして決定したのは，「ラップチンドン」「民謡ボディパーカッション・チンドン」「よさこいチンドン」「ギャグチンドン」「アンサンブルチンドン」「バトンチンドン」の6グループである。グループ決定後，児童はさっそく取り入れたい楽器を相談したり口上を考えたりしていった。

(2)　チンドンの練習

いよいよグループ練習に取りかかると，音楽室は異様な盛り上がりを見せた。

「ラップチンドングループ」は，日頃の様々な“不満といらだち”を口上にして，一人一人リズムに乗せてつないでいくことになった。そして，ダンスは，ラップらしくしたいとヒップホップダンスの教則ビデオ[6]を見ながら練習を始めた。チンドン太鼓とアフリカンドラム，ダンスを組み合わせていった。ノリのよい男子児童Bは，家から古いLPレコード盤を持ってきてターンテーブルをやりたいと言い出した。

「よさこいチンドングループ」は，よさこいを習っている女子3人が中心となって，自分たちのよさこいチンドンを作ろうと張り切って練習を開始した。テープレコーダーで音楽を流しながら，鳴子を持ったまま隣の図工室にこもって踊り続けていた。

「ギャグチンドングループ」は，チンドン太鼓による入場の合図を決めて，練り歩きの練習に余念がなかった。楽器の音色を交えて一人一人の自己紹介をやるなど，大変意欲的だった。使用楽器は様々な擬音笛，トーキングドラム，チャッパを組み合わせていた。

「民謡ボディーパーカッションチンドングループ」は，チンドン太鼓を受け持ったリーダーが堅実に音楽を構成していった。1ヶ月前に学習した《こきりこ節》を中心とし，歌って踊って入場するスタイルをとっていた。音楽室の机の間を行ったり来たりと練り歩きを一番に練習し始めたのはこのグループだった。口上の場面では，ボディとボイスパーカッションを取り入れながら，うきうきする気持ちを一人一人伝えようと工夫し始めた。使用楽器は，びんざさら（編木），こきりこ，笙を組み合わせていた。

「アンサンブルチンドングループ」は，女子8人の集まりだ。人数が多く，なかなか意見がまとまらず苦労している様子が見えたが，しばらく見守ることにした。やがて《聖者の行進》（アメリカ民謡）のメロディーを鍵盤ハーモニカで演奏し，そこにブラジリアンリズムに用いられるスルドの他，トロンボーン，トムトムを入れて音楽作りを始めた。

「バトンチンドングループ」は，女子4人のグループだ。チンドン太鼓を担当する児童がリーダー役，リングバトンを得意とする児童がおどり，鍵盤ハーモニカやリコーダーを得意とする児童2人がメロディーを受け持った。話し合いで，テーマ曲が《明日があるさ》（中村八大作曲）に決まり，それとチンドンを合わせる練習を繰り返し行っていた。

(3)　チンドンの音色と響きの調整

音楽作りを進める過程で，やはりいろいろな問題点が出てきた。

第一に，チンドン太鼓の難しさである。右手にもったスネア・ドラム用のスティックで2つの太鼓を，そして，左手には鉦用の撥（木の柄の先に小さい円筒形を金槌のように付けたもの）を持ち，鉦をチンチンと自在に打ち鳴らすにはかなり練習を要した。ベースとなる基本リズムをそれぞれのグループで考え，それを繰り返すことをまず初めに指導した。

第二に，チンドンと他の打楽器，旋律楽器と合わせることの難しさである。リズムと旋律の重なりへの意識が希薄であったため，練習途中をビデオにとって音を聴かせ，考えさせる必要があった。

第三に，テンポが定まらないこと。テンポを保つ役割の必要性が出てきた。これは，チンドン太鼓が受け持ったり，他の打楽器奏者が担当したりとグループごとに話し合いで決められていった。

第四に，練り歩きながら演奏することの難しさである。立奏で音を確かめ合った後は，練り歩きながら，おどりながらの身体表現を伴った演奏の練習を促していった。

第五に，いかに表現内容を音楽的に豊かにするかということだ。この場合の，音楽的に「豊かにする」とは，どのような楽器編成であっても，その響きや音の構成に何らかの秩序を持たせ，音の集合としてのまとまりを作ることが必要であると考えたためである。この授業は音楽の授業の中に位置づけられる。したがって，演奏された内容（響き，音の集合の状態，全体的なまとまりなど）が，音の集合としての必然性を持っていることが大切であると思うからだ。また，児童が互いに響きを聴き合うことが出来ることも，音楽授業にとっては大事である。筆者が最も悩んだのがこの点であった。それぞれのグループの個性，持ち味をいかしながら，なおかつ音楽的に充実した内容を学習するとよいと思った。しかしながら，児童にとっては，まだまだこの点に関する問題意識は当然のことながら希薄であった。そこで，児童の実態に合わせ，最低限のできることから少しずつ指導していった。それは，以下のような順であった。

・チンドン太鼓の基本リズムは，テンポをそろえ繰り返すこと。
・チンドン太鼓と他の打楽器，もしくは，旋律楽器のテンポ，リズムを正確に合わせること。
・音楽の初め，中，終わりの音色の移り変わりの変化，流れを意識させること。
・チンドン太鼓と他の楽器の音量，音色，響きを，良く聴きあって調整をすること。

また，練習途中に，各グループでどんな工夫をしているか確認させ，それを全体に知らせ広げていった。すると自然にそれらがチンドン発表の審査の観点に決まっていった。観点は以下の5点であった。

①チンドンの基本技術，②踊りや衣装など視覚的な工夫，③口上のうまさ，面白さ，楽しさ
④行進，練り歩きのうまさ，⑤個性，センス，アイディア

(4)　チンドンの発表（写真13～15）

①　ねらい：互いの工夫やよさを認め合い，日本の民俗音楽としてのチンドンを楽しむことができる。

②　ねらいを達成するための視点

表2　チンドンの発表場面における展開

時	○学習活動・予想される児童の反応	◎支援　　◇評価
5	○本時の学習課題を確認する。 各グループの工夫や良さを見付けてチンドンを楽しもう！	◎審査ポイントを確認させる。
10	○グループごとに，練り歩きのコースや，口上，リズムやテンポを確かめ合う。 ・口上の声をもっと大きくしよう。 ・テンポをしっかり合わせよう。 ・始まりをきちんと合わせよう。	◎会場を広く使うよう指示する。 ◎チンドン太鼓の音色とリズムを再度確認させる。 ◇工夫したポイントを確認し，表現に意欲をもつことができたか。㊞
25	○チンドン発表会をする。 ・それぞれ工夫して作ってきたチンドンを発表し合う。 ・各グループの工夫を発表し合う。	◎作り上げたチンドンをのびのび発表するよう促す。 ◇作り上げてきた自分たちのチンドンを生き生きと表現することができたか。㊦ ◇音色の移り変わりや多様な表現を感じ取りながら演奏したり聴き合ったりし，チンドンを楽しむことができたか。㊞㊥
5	○チンドン発表会を審査し，チンドン作りの感想を各自まとめる。	◎審査ポイントごとに相互評価させ，それぞれの良い点を発表させる。 ◇チンドンの工夫や良さを見付けシートに自分の言葉で詳しく書くことができたか。㊩

（㊞：関心・意欲・態度　㊥：感受・表現の工夫　㊦：表現の技術　㊩：鑑賞の能力）

写真13

写真14

写真15

本時は，上記の５点の審査の観点に沿って，これまでの練習の成果を互いに発表し合うこととした。審査といっても競い合い序列を付けるためではなく，聴いたり見たりする視点を明らかにすることにより，それぞれのグループの工夫やよさを具体的に見付け，それを認め合い，そして楽しむことを目的とした。

3.3　研究のまとめ

3.3.1　チンドン作りの学習で学ぶことができた日本の音楽の特徴

児童は，それまでの日本民謡を素材にした音楽作り，祭囃子の唱歌，日本の発音玩具を使った音楽作りの経験から楽器を選択し，ラップや既習曲，他のいろいろな楽器を組み合わせ，おどりを工夫しチンドンを作っていった。換言すれば，これまでの経験を生かしながら自由な発想で「多様な表現」を楽しむことができたと捉えられる。また，チンドンを作りながら，旋律の繰り返しの過程で，音楽を膨らませたり，削ったりしながら「音色の移り変わり」のプロセスを楽しむこともできた。音楽を作り続けながらそこに変化を加えてゆく日本音楽の「プロセス重視」の音楽作りは，チンドン作りの過程で有効に働いた。

今回，最終的には発表会を目標にしたが，実は人に聴かせるという場面でない方が，非常に生き生きとした児童の姿を見ることができた。授業におけるプロセス重視の考え方は，このような視点と通ずる。日本の伝統音楽の表現の場においては，この継続的な工夫が重要な特徴となる。各々が得意な楽器，スタイルを寄せ集めて作る音楽表現は，非常に楽しく充実した学びとなったようだ。チンドン作りは，既成の楽曲の再現といった楽譜による音楽作りではなく自由度が高い。そのことは学習後の児童の感想にも見ることができた。

- どんなチンドンになるのか心配だったけれど，やっていくうちにいろんな楽器を取り入れながらどんどん楽しくなっていった。
- 初めてチンドンをやってみてすごく面白かった。何が面白かったかというと，自分でチンドンを作るのが面白かったです。こうやって自分たちで作るのをもっとやりたいです。
- アイディアを出すのが難しかったです。でもやっているうちに歩き方のアイディアがどんどん出てきました。チンドン作りをしているプロの人はもっと大変だなあと実感しました。
- みんなで協力して音楽を作るなんて！初めは意見が合わずバラバラだったけれど，最後にはすごいチンドンができたと思います。
- みんなといっしょうけんめい練習できてとても楽しかったです。チンドンを鳴らすのは，大変だったけれど，いっぱい練習したから上手にできて良かったです。
- 別のチームはチームで良いところがあって，チームごとに全然ちがいました。やっぱりたくさんのグループがあると，１つ１つちがってとても良いと思いました。

グループ作品については，「ラップチンドン」の人気が高かった。

- 他のチームのチンドンで良かったのは，ラップチンドンです。とても個性的で思いっきり言いたいことを言っていて，聞いている私まですっきりしました。また，このようなチンドン作りを通して，もっと友達を知りたいです。

児童には，日本の音楽を学んだという特別な意識は全くない。音楽経験の１つとして総合的に感想，意見を述べている。反省点も上がっていた。

・口上をもっと工夫すればよかったと思いました。
・リズムがバラバラになってしまったので，もっと練習してもう一度やりたいです。
・口上やおどり，楽器など様々な変更をしながら今日までやってきましたが，もっと早くからちゃんと工夫ができれば良かったです。

4．ま　と　め

秦野のチンドンを題材とした実践研究は，小学校高学年における「我が国や諸外国に伝わる様々な楽器」を用いた表現の実践であり，実践結果は，「自由な発想を生かして表現し，いろいろな音楽表現を楽しむ」ことを実現することができた。児童の感想からも，「チンドン」の実践が，児童の積極的な活動を生み出し，学習意欲を高めたことも明らかである。さらに，事前学習していた八木節やこきりこ節などの伝統音楽が，チンドンの音楽作りに当たって有効に働きかけたことも分かった。

かつて，チンドンは「雅楽」「歌舞伎」「箏曲」など，限られた演奏の場，或いは演奏者による特別の状況下で演奏された音楽とは異なる，地域の身近な音楽であった。それは，各地の盆踊りや祭囃子，また門付けの音楽などとも近い音楽であった。しかし，高度経済成長期以降，商店の宣伝のための音楽は，CM や CF の音楽にとって代わられ，このごろは大都会以外にはチンドンを見聞きする機会はほとんどなくなっている。

しかし，冒頭でも述べたように，近年の音楽文化の多様化とともに，ふたたびチンドンの魅力がクローズアップされ，現代において，この音楽表現の方法に多くの注目すべき点があることにも気づく傾向が出てきた。そのような新たな傾向の中で，今回は学校教育の題材としてチンドンを取り扱ったわけであるが，実践結果に見る限り，この音楽の教材としての有効性は非常に高いと感じている。

ただ，ここで注意しておきたいことは，本研究は，チンドン太鼓を新たに作ることによって実践が行われた授業であるが，手作り楽器の活動とは異なる。ゼロから作ることではなく，身近な環境の中から発音具を「さがして，集めて，響きを聴き合って，組み合わせる」活動といえよう。この研究の前段階として，児童は生活の中にある発音玩具を探し集めて合奏する学習を行っていたり，唱歌を取り入れた実践を行っている。このことは，日本の様々な音色の楽器の演奏を体験することによって，すでに多様な音色への関心が育まれていたことを意味する。このことが本実践をよりスムーズに遂行することに役を果たした。

また，本実践で重視した点で，音や音質について児童がより深い考察を試みている点も興味深い。さらに，秦野が，演奏会に至るまでのプロセスに注目し，そこに音楽教育の重要性を認めている点も，今回の実践にとって重要なポイントであった。

（本論文の執筆は，１～２，および４を茂手木が担当し，３を秦野が担当した。）

【注】

1）上越教育大学音楽学研究室主催「地域と大学の交流コンサート第１回　日本の音と声をめぐって」に於いて〈ミュージックファンタジー～不思議な国の音風景～〉と題して発表 2001．7．15　上越教育大学講堂

2) 上越市立春日小学校主催「音楽フェスティバル」において，〈祝祭～収穫を祝う民謡のひびき〉と題して発表　2002．10．11　上越文化会館
3) 《八木節》《こきりこ節》《大漁唄い込み》については，次の資料の音源を用いた。
①小学校音楽鑑賞CD各学年共通①　東京，教育芸術社　COCG-12899
②『邦楽百科CDブックIII　CD版日本の音　声の音楽3』日本伝統音楽芸能研究会編　東京，音楽之友社　1999　GES-11004・11005
③『日本の楽器　日本の音4　歌・合奏』東京，小峰書店，2002．2　COM-0004
4) 『日本国語大辞典』第2版（2002．1　小学館）によれば，口説きとは，詩形で構成され，同じ旋律を繰り返して歌うものとされている。また，吉川英史監修『邦楽百科事典』(1984．11．　音楽之友社) p. 328には，〈くどくどと説明する〉という原意から叙事的な歌謡の名称として用いられ，また心中を切々と訴えることから，多くの種目で音楽の構成単位のうち詠嘆的，哀艶なものの名称として用いられていると記述されている。
5) 富山商工会議所，富山市役所観光振興課主催，第48回全日本チンドンコンクールの映像「富山市役所での開幕パレードの様子」（富山市役所光の広場・城址公園自由広場にて）2002．4．6　秦野育子撮影
6) 『ダンス・スタイル・アクセル』リトーミュージックvw-192（ロック，ポップ，ブレイク，ハウスなどのストリート・ダンスの教習ビデオ）1996

【引用資料】

(1) 堀江誠二『チンドン屋始末記』1986．3　東京，PHP研究所
(2) 茂手木潔子「日本の音楽学習へのアプローチ法」日本音楽教育学会編『音楽教育学研究3 音楽教育の課題と展望』東京，音楽之友社，2000．4　pp. 93-112
(3) 秦野育子「おもちゃから学ぶ日本の音」『教育音楽小学版　第57巻　第8号～11号』東京，音楽之友社，2002．8～2002．11
(4) 文部科学省『小学校学習指導要領解説　音楽編』1999．5　教育芸術社
(5) 茂手木潔子「チンチン ドンドン チンドンドン」『学鐙』2002．7　東京，丸善書店．pp. 10-11
(6) 富山商工会議所，富山市役所観光振興課「第48回全日本チンドンコンクール」パンフレット　2002．4

Applied Research regarding the Learning of Japanese Music by the Use of *Chindon* in an Elementary School General Music

Kiyoko MOTEGI*, Ikuko HATANO**

ABSTRACT

This research focuses on the introduction of Japanese music into the primary school curriculum (5th to 6th years) by studying the music of *chindon*. The origins of the musical activity of what was once referred to as *chindon-ya* dates back to the mid-19th century. *Chindon* became highly popular from the mid-1950s, but this form of musical activity has not yet been studied in the context of music education. The reason for this seems that what is considered properly "musical" for music education is far removed from the musical activities of popular street musicians. In recent years, however, as musical values have become more pluralistic, the music and the musical characteristics of *chindon* are being rethought. *Chindon* shares characteristics with *kabuki* and folk music: flexible and improvisational music-making, the employment of a large number of sound sources and instruments resulting in many timbres, and the use of body movements similar to what is found in *Shinnai,* in traditional door-to-door performances, and in the *gyōdō* of Buddhist music. Using *chindon* in music education heightens the desire of pupils to make music and foster rich expressive possibilities. In addition, *chindon* appeared to be useful as a means for pupils to enter the world of Japanese music.

* Division of Music and Arts, Department of Music
** Naoetsu Elementary School